

【調査報告】

名護市内及び沖縄島における希少な鳥類の観察記録及び 希少な繁殖記録等について

—— 2019年春季から2020年夏季まで ——

嵩原建二, 宮城国太郎, 高良淳司, 渡久地豊, 村田尚史, 奥間邑明, 小高信彦, 新垣裕治

Record of the rare bird species and rare breeding cases in Nago City and Okinawa Island

—— Spring 2019 to summer 2020 ——

TAKEHARA Kenji, MIYAGI Kunitarou, TAKARA Junji, TOGUCHI Yutaka,
MURATA Naofumi, OKUMA Kuniaki, KOTAKA Nobuhiko, ARAKAKI Yuji

要旨

本報告は、2019年4月から2020年8月までの名護市内を含む沖縄島一円における留鳥の希少な繁殖記録や確認記録の他、渡り鳥の希少な繁殖記録と確認記録などを中心にして、過去に確認された鳥類記録の亜種の再検討など加えてとりまとめたものである。今回、これまで宮古諸島が北限とされているズグロミゾゴイやオオクイナの沖縄島における確認記録と、冬鳥とされているセイタカシギの営巣確認、渡り鳥では沖縄島で初めての確認記録となるナンキンオシとオレンジツグミの確認記録を掲載した。また、過去に沖縄島で記録された種オオシロハラミズナギドリについては、国内における知見が増え、種クビワオオシロハラミズナギドリとして再検討する必要性が生じたことから、種の再同定を行い、観察記録の見直しを行った。なお、本種の確認記録は南西諸島初記録である。

キーワード：沖縄島, ナンキンオシ, オレンジツグミ, セイタカシギの繁殖, クビワオオシロハラミズナギドリ

I. はじめに

鳥類は自然界ではその食物連鎖の中で、上位に位置する生物であり、鳥類の記録を集積することは、その地域の鳥類相を理解するとともに、「環境指標生物」としての側面から自然環境を理解する上で有効なアプローチである。また、鳥類記録を経年的に集積することでその地域の鳥類相の変遷を理解することができ、さらに鳥類の保護だけでなく、その地域の自然環境の保全に資する基礎的な資料となるものでもある。このことから筆者らはこれまでに名護市を含む沖縄島北部地域における鳥類記録等を整理し、その生息状況を把握する取り組みを継続的にすすめてきた。本報告はその継続的な取り組みの一環として、2019年4月から2020年8月までの名護市内を含む沖縄島一円における留鳥や渡り鳥などの希少な確認記録（亜種の再検討を含む）や繁殖記録をとりまとめた

ものである。本報告が沖縄島における鳥類相を理解し、さらに自然環境の保全や鳥類の保護に資する資料及び環境学習やエコツアーリズム等の資料として供することができれば幸いである。なお、本報告では学名と掲載順は日本鳥学会（2012）に準拠した。さらに本研究の一部は環境省環境総合推進費（JPMEERF20184004）によるものでもある。

II. 名護市を含む沖縄島北部地域における希少な観察記録

1. ヒシクイ *Anser fabalis serratirostris*

2019年12月8日に屋我地島の羽地内海干潟で9個体の飛来を確認した（図版I写真1）。本種は県内各地に不定期飛来（IV：irregular visitor）として飛来してることが知られており（日本鳥学会 2012）、県内ではほぼ毎年のごく少数が観察されている。

名護市内ではこれまでに羽地の田井等水田（2012年11月, 2014年1月, 2017年12月）や呉我水田（2014年12月）、三原地区（1994年11月）など多くの飛来記録が見られる（嵩原ら, 2019）。したがって、市内では2017年以来3年ぶりの飛来であろう。しかしながら、この群れは市内では留まらず更に南下したようである。

本種は国指定の天然記念物であり、環境省や沖縄県版のレッドリストに「絶滅危惧Ⅱ類」にランク掲載されている保護すべき貴重種である。したがって、越冬中はその生息に影響がでないような配慮が必要である。

2. ナンキンオシ *Nettapus coromandelianus*

本種の発見の経過としては、2019年12月5日に大宜味村大保ダムの脇ダムで、名護市在住の玉城学氏により撮影されたカモ類の撮影画像中に不明のカモ類が撮影されていることがわかり、その後著者の一人である渡久地による同年同日夕刻の現地調査で本種の雌個体と同定された（沖縄タイムス：2019年12月17日付朝刊、琉球新報2019年12月24日付電子新聞）。その後、同個体は約1週間同脇ダムに滞在した（図版I写真2）。

本種は国内においては迷鳥（AV：Accidental visitor）として渡来し（日本鳥学会, 2012）、国内では1972年3月に与那国島（今井, 1976）、2010年6月に多良間島（羽地ら, 2011）と大阪（佐竹ら, 2011）での観察記録が知られている。また、ごく最近2014年5月に長崎県での確認例（宮崎ら, 2019）や2015年7月に高知県での確認例（佐藤ら, 2016）がある。

今回の確認経緯としては、2019年11月11日から12月3日に沖縄島北部に隣接する鹿児島県与論島で雌3個体が初確認された（小野田明子私信；<https://yoronisland.nature2nd.amamin.jp/e748453.html> 2019年12月4日参照）。その後、その内の1個体がしばらくして移動してしまったことが確認されている。このことから、同島に隣接する沖縄県側の国頭地域に迷行する可能性が高いものと考えられた。したがって、今回、沖縄島北部で観察された個体は、この与論島から移動南下した1個体である可能性が高い。

今回の沖縄島での確認例（図版I写真2）は、2019年11月の鹿児島県与論島に次ぐ確認例ではあるが、同島に滞在していた1個体が沖縄島に移動してきたものと考えられることから、これらの記録をまとめて扱うと、国内では6例目にあたるものと思われる。また、与論島や沖縄島ではこれまでに確認例がないことから、今回の確認が初確認である。

3. オオクイナ *Rallina eurizonoides*のさえずり記録

2019年5月21日午後21時30分に、沖縄島の国頭村の山

中にて本種と思われるオスのさえずりが著者の一人である宮城により録音された。その姿（個体）を確認することはできなかったが、これは沖縄島で2例目の確認記録であり、沖縄島では初めての鳴き声の採録と思われることからその概要を報告する。

本種の鳴き声を確認した場所は、国頭村の伊部川付近にある標高45mの丘陵地で、常緑広葉樹林の樹冠付近で鳴いていた。録音はOLYMPUS リニアPCMレコーダLS-10を用いて録音し、音声解析ソフト Raven Liteにて分析した。

オオクイナの鳴き声を確認された環境は、オオバキやウラジロエノキなどが生い茂った若齢の常緑広葉樹林であった（図版I写真3）。

本個体の鳴き声は、「カッ、カッ」もしくは「ファ、ファ」と聞こえる節を繰り返し鳴いていた。声の周波数は、0.35kHzから8.30kHzでもっとも強い声の周波数が0.9~1.2kHz帯であった（図1）。声の長さは1音約0.16秒で、同じ声を2回鳴き、1.8秒程度の休止を入れる句であった。今回録音した音源の声紋と台湾で録音されたオオクイナの声紋（<https://www.xeno-canto.org/476076>：2012年5月5日閲覧）を比較すると極めて似ており、オオクイナにほぼ間違いないと判断した。なお、鳴き声は初確認が2019年5月21日で、その後5月23日にも確認された。

本種はインドからフィリピンおよびセレベスにかけての南アジアなど熱帯から亜熱帯にかけて分布し、7亜種に分けられる（Dickinson, 2003）が、日本で繁殖するのは亜種 *R. e. sepiaria* で最も大型とされ（黒田編, 1984）、東洋区系の鳥類の一つである。

県内（国内）では八重山諸島に分布することが知られていたが、最近宮古島や多良間島でもその数は少ないが、繁殖が確認されている（日本鳥学会, 2012）。一方、沖縄島では1985年8月に本部半島の伊豆味で1回のみ迷鳥（IV）としての観察記録が知られている（嵩原, 1986; 沖縄野鳥研究会, 2010; 日本鳥学会, 2012）。なお、今回本種の鳴き声を確認された伊部川に近い国頭村安田では、Short (1973) により1972年2月にオオクイナ2個体の確認記録が報告されているが、これは当時まだ新種記載されていなかったヤンバルクイナを誤認したものと考えられている（McWhirter et al, 1996）。

本種は最近環境省（2020）により改訂された「絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト」と県のレッドデータブック（沖縄県自然保護課, 2017）において絶滅危惧IB類（EN）のカテゴリーに掲載され、絶滅が危惧されている種である。したがって、その生息状況の把握を今後もすすめて、その種の保全に資する生息分布や生態的な情報の収集が今後ともに必要であろう。

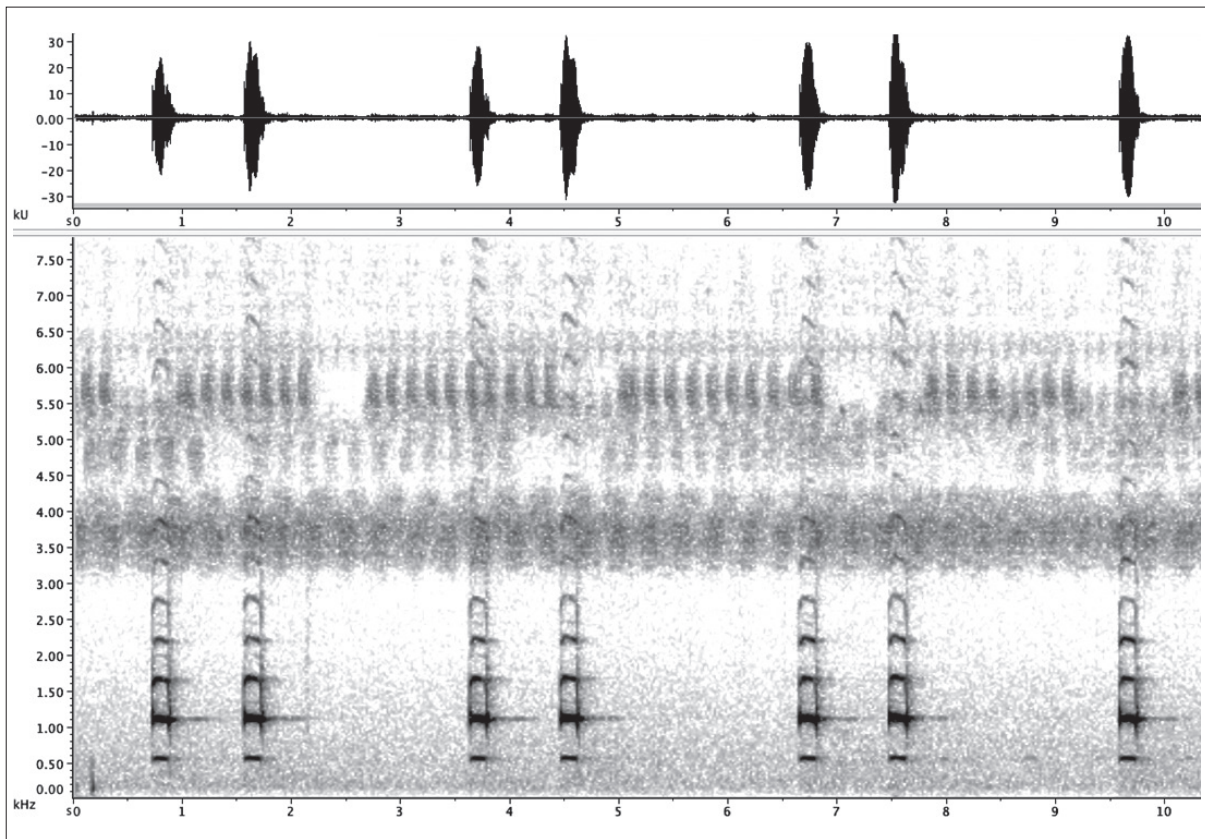


図1. オオクイナのサウンドスペクトログラム

4. アマヤマシギ *Scolopax mira* の最近の観察例

2019年12月13日に名護市の多野岳につながる番越林道で、著者の一人である村田により2個体が観察された(図版I写真4)。今回の確認例は名護市内では1997年11月の名護岳展望台における確認例(高原, 2006)以来の13年ぶりの生息確認であろう。

本種は琉球列島の固有種であり、沖縄県では天然記念物に指定された貴重種である。また、沖縄県が作成したレッドリストでは「絶滅危惧IA類」にランクされ、より絶滅の危険性が高い種として掲載されている(沖縄県自然保護課, 2017)。

このことから、名護市内においても本種の保護・保全が求められるべきである。しかしながら、市内には「野生化したイヌやネコの他、外来種のマンガース」が定着し、その個体数も多いように思える。おそらく、地上を主な餌場や休息地及び営巣地としている本種にとっては、こうした外来種等の捕食圧などその生息に影響を及ぼしていることが大きいと考えられる。したがって、市内における本種の生息地の保全を図るとともに、「野生化したイヌやネコの他、外来種のマンガース」の個体数管理などを早急に行い、種の保全に関わる大きな脅威を除去する必要性があろう。

5. オレンジツグミ *Zoothera citrina* の一亜種(亜種不明)

2020年5月10日9時35分に沖縄島北部の国頭村チヌフク林道沿い森林内において、著者の一人である小高によって設置され、地上を利用する動物種の生息調査を目的とした自動撮影装置により動画撮影された。その画像は林内であるため露光不足によりカメラの赤外線撮影への切り替えが自動的に設定された結果、動画最初の画面1~2秒がカラー画像であるが、その後は白黒画像になっていた(図版I写真6)。しかしながら、カラー画像で本個体は頭部が橙色を呈し、背中は灰色であることが確認できる(図版II写真1)。さらに白黒の画像では目の下と耳羽後縁に黒色の2本の平行した縦線があることや大雨覆いの先端に白色部が見られることで、本種の特徴を確認することができ、本種と判断した。したがって、沖縄島からはこれまで本種の確認例は見られないことから、今回が初めての観察例である。

国内では2013年4月26日に鹿児島県トカラ列島平島で日本初記録として雄個体が確認されている(村岡ら2014)。しかしながら、亜種の特定までには至っていない。今回の確認も映像のみであることで、亜種の特定には困難さがあり、村岡ら(2014)の平島で確認された個体の亜種区分に関する指摘にあるように、中国の貴州省や江

西省、広東省で繁殖し、渡り期には河北省の北東沿岸部まで到達するとされる亜種*Z.c.melli*か、韓国で確認記録のある*Z.c.courtoisi*のいずれかであろう。なお、本種の和名については、村岡ら(2014)では山階(1986)による和名の記述である「オレンジジツグミ」の名称から、新称として「オレンジジツグミ」を提唱していることから、本報告ではこの新称に従った。

県内では2014年5月19日に久米島シンリ浜おける鳥類標識調査中に雌個体が捕獲され、国内で初めて標識・放鳥されている(2014年5月29日付琉球新報電子新聞:<https://ryukyushimpo.jp/photo/preentry-226166.html> 琉球新報デジタルサービス閲覧2020年10月18日)。したがって、今回の確認は国内3例目であり、県内では2例目の確認記録となるものである。

III. 沖縄島中南部地域における希少な観察記録

1. ズグロミゾゴイ *Gorsachius nelanolophus* の沖縄島からの記録

2019年6月15日に糸満市米須の平和創造の森園内で、南部自然を守る会の橋本幸三氏により1個体が観察・撮影され、新聞紙上に公表されている(沖縄タイムスプラス:<https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/435267>:2020年5月18日閲覧)。本種の沖縄島における確認例はこれまでに知られていないので、今回が初めての確認例であろう(図版I写真5)。

本種は宮古・八重山諸島に留鳥として生息分布していることが知られている(沖縄野鳥研究会, 2010; 日本鳥学会, 2012; 仲地・久貝, 2019)。特に宮古諸島の宮古島では留鳥として繁殖が確認されたのは2011年6月とごく最近のことである(砂川, 2011)。本種は沖縄県以外では北海道の利尻島や四国(徳島)での迷行例が知られている(日本鳥学会, 2012)。

一方、同じ東洋区系のムラサキサギやシロハラクイナなどがしばしば本来の繁殖分布地から遠く離れた九州、四国、本州、北海道などに迷行することが知られており、シロハラクイナは一部地域で繁殖例も見られる(日本鳥学会, 2012)。さらに最近、前述したように同じ東洋区系のオオクイナが沖縄島北部で確認され、留鳥として生息している可能性がある。

こうした東洋区系鳥類の繁殖分布の拡大は、各種の持つ飛翔力や環境適応力などによるものと考えられるが、こうした迷行例が沖縄島で増加していくことで、本種ズグロミゾゴイも宮古島同様に沖縄島でも留鳥として定着する可能性が考えられる。

2. セイタカシギ *Himantopus himantopus himantopus* の繁殖

2020年6月24日に沖縄市泡瀬(人工島)で、県内では旅鳥及び冬鳥として渡来するセイタカシギの抱卵と孵化した雛1羽を確認した。本種については、日本鳥学会(2012)によると沖縄島では不定期繁殖(CB)としているが、その詳細は報告されていない。また、沖縄野鳥研究会(2010)によって、1998年に糸満市で繁殖記録があるという記述が見られるが、その詳細な報告は見当たらない。したがって、沖縄島(県内)での本種の繁殖確認の報告は公式的には今回が初めてのことであろう。

本種の造巣のサイズは縦35cm×横25cmで、産座には小さな枝サンゴのレキが無数に敷き詰められており、巣内観察時、卵は4卵でそのうち1個が孵化していた(図版II写真2)。本種の孵化については、最初の孵化から次の孵化まで1~2時間程度の間隔があることが知られていることから(三重の野鳥:光昌のホーム<http://mitumasa.net/birdtop/bird/seitakasigi20120702/seitakasigi20120702P.html>2020年7月31日閲覧)、おそらく、その後、1~2時間程度の間隔をそれぞれおいて4卵とも孵化したものである。なお、本地区では、ほかにも1巣の営巣が見られたので(山城正邦私信)、本地域で2巣(2番)の繁殖が確認されたことになる。本種の孵化が確認された30日後の同年7月24日に再び営巣確認地を訪れると、親鳥1個体に雛(幼鳥)3個体(おそらく30日齢)が確認された(図版II写真3)。これらの幼鳥は親鳥と行動を一緒にしながら、浅い水辺を歩きまわり、餌を探していたので、自力での採餌ができるようになっていた。おそらく、この幼鳥の群れは、個体識別はしていないが、6月24日に孵化した雛を確認した巣から巣立った兄弟群と思われる。なお、この幼鳥が実際に飛べるかどうかを判断するために幼鳥に近づいてみると、飛んで逃げるができず、水面に浮いて移動したことから(図版II写真4)、まだ飛べない幼鳥もいるものと判断した。しかしながら、セイタカシギの雛(幼鳥)は30日齢で40~50m程度飛翔することが知られている(三重の野鳥光昌のホーム<http://mitumasa.net/birdtop/bird/seitakasigi20120702/seitakasigi20120702P.html>2020年7月31日閲覧)ので、飛翔力はあった可能性も考えられる。さらに、その1週間後に観察を行うと、同様に幼鳥3個体(おそらく37日齢)が確認され、そのうちの1羽は親鳥と一緒に飛翔して移動したことから、37日齢の幼鳥ではすでに親鳥と行動を共にする飛翔力があることを確認した。なお、その後の観察でも親鳥と一緒に飛翔移動している若鳥(46日齢)3個体が確認された(図版II写真5)。

このことから、本種は沖縄島(県内)においてこれま

での旅鳥や冬鳥としての渡り区分の扱いから、その一部は留鳥としての渡り区分が行われることになるものと思われる。

3. リュウキュウオオコノハズク *Otus lempiji pryeri* の繁殖記録

2019年5月7日に中城村立津覇小学校図書室北側軒下にいる巣立ち雛が確認され、この写真が沖縄タイムス（2019年5月9日付）に掲載紹介されている。しかしながら、この巣立ち雛はこの掲載記事では「リュウキュウコノハズク」となっていたが、これは誤認であり、掲載写真は「リュウキュウオオコノハズク」であった。

その後、筆者の一人である宮城により現地調査を実施した結果、新聞報道では営巣木は大木の桑の木と記述されていたが、実際には植栽されているモクマオウにできた樹洞（うろ）であった可能性が高いことが推定された。これは親鳥と巣立ち雛は確認できたが、樹洞を利用している状況は観察していないことによる。

本種（亜種）は本来、大径木の出現する林齢の進んだまとまった森林内において、大径木にできた洞（うろ）などに営巣することが知られている。しかしながら、人の出入りの多い小学校校舎近くでの営巣は興味深い。今回の繁殖確認例はこうした人工的な環境に隣接する場所も営巣地として利用していることが示され、本種の環境適応力の広さを示唆しているものであろう。

なお、本亜種は最近改訂された環境省（2020）による「絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト」と沖縄県のレッドデータブック（沖縄県自然保護課，2017）において絶滅危惧Ⅱ類（VU）のカテゴリーに掲載され、絶滅が危惧されている種である。したがって、その生息状況の把握を今後すすめて、その保全に資する生息分布状況や生態的情報の収集を行い、その種の保全に活用していくことが大切であろう。

4. リュウキュウサンショウクイ *Pericrocotus divaricatus tegimae* の繁殖

2020年5月20日に読谷村字喜名の国道58号に隣接する一般道と住宅地との境界にある細い長い緑地のリュウキュウマツに営巣が見られた。周辺環境は巣の西側は住宅地で、東側は道路（4車線）と若林齢の森林や黙認耕作地であった。営巣したリュウキュウマツは樹高が6.35m、胸高直径は45cmで、巣の高さは5.35mの位置にあった。営巣を確認した時点では雛がいるものと考えられ、雛の白色の糞を親鳥が採餌する様子も見られた。また、給餌の際、雌がしばらく巣に座り、巣にとどまるものの雌雄交代で雛への給餌が確認された。その後、5月30日の午後の観察では雛の数は3個体で、小さな巣にはみ出

している状況も観察された（図版Ⅱ写真6）。この時点では雛の羽はまだ十分に伸びておらず飛ぶことはできないものと思われたが、この雛は翌日5月31日の午後には姿が見えず、巣立ったものと思われた。したがって、育雛期間は10日前後と思われる。なお、別亜種サンショウクイは雛の数が4から5とされることから（黒田編，1984）、雛の数は3と亜種サンショウクイより少ないものと考えられた。

本種は本来、森林性の鳥類であるが、最近、沖縄島において市街地にも進出・営巣する傾向が見られ、読谷村内では2000年5月に同村字伊良皆にある読谷高校正門前にある街路樹木立で営巣したことが知られている（嵩原，2001）。また、北谷町では人の往来の多いアメリカンビレッジ近くにある町道沿いの街路樹での営巣も報告されている（嵩原ら，2019）。こうした場所はいずれも人や車の往来の多い場所でもあった。

今回確認した営巣地は国道沿いに植栽されたマツの木立であり、ここは特に車両の往来が激しく、かなり交通量の多い場所であり、しかも車の通行する騒音も高い場所であり、さらに、住宅地にも隣接していた。

本種がこのような場所を営巣地として選択しているのは、おそらく、その捕食者となるハシブトガラスやツミなどが容易に巣に近づけないように人や車の往来が多い環境を選択している可能性がある。

本亜種は秋期や冬季に渡来するサンショウクイの別亜種として「日本鳥類目録」（日本鳥学会，2012）では扱われている。しかしながら、琉球列島の独立した種とする見解（Brazil，2009）も見られる。本報告では「日本鳥類目録」の扱いに準じて亜種として扱った。本亜種は1970年代から九州や四国などでも繁殖しており、「日本鳥類目録」（日本鳥学会，2012）では九州の大部分、熊本、宮崎、鹿児島と四国の愛媛と高知は留鳥として生息し、本州では奈良や広島で迷鳥（IV）として記述されている。その根拠として三上・植田（2011）により西日本へその生息分布の拡大傾向が指摘され、さらに、2012年12月には神奈川県でも確認されている（日本野鳥の会神奈川支部，2013）。こうしたことから本亜種は生息分布域がより北方へ拡大してきている傾向が認められている（五百澤ら，2008）。おそらく、前述したように本亜種の持つこうした市街地への環境適応力の高さによる生息分布の拡大が、本亜種の飛翔力とともに琉球列島よりさらに北方にその生息分布を拡大する基盤になっている可能性が高い。

5. ムクドリ *Sturnus cineraceus* の糸満市における初繁殖記録

2019年5月9日に糸満市潮崎町にある糸満南小学校グ

ラウンドの防球ネットをはった支柱上部の小さな隙間で数つがいが育雛活動を行っていることを確認した。この育雛行動については新聞に掲載され、その紹介記事が見られる(2019年5月10日付沖縄タイムス記事)。本種の繁殖確認は糸満市内においてはおそらく初めてであろう。その後、同市西崎の親水公園近くで繁殖期に10個体ほどの幼鳥を含む群れを確認した(図版Ⅲ写真1)。

本種は県内各地に通常旅鳥および冬鳥として渡来するが、沖縄島では那覇市の一部(具志地区)での繁殖が知られている(高原ら, 2009)。最近では2019年7月19日に那覇市垣花(国際自由貿易地域近く)で40羽を超える群れを確認した。この群れの中のおおよそ半数は幼鳥が混じり、ここで巣立った幼鳥個体であるものと考えられた。また、隣接する豊見城市でも2019年6月21日に豊崎の海浜公園や瀬長島野球場近くで採餌する個体が確認されたことから、ここでも繁殖しているものと思われる。さらに2019年9月15日には与根遊水地(通称三角池)近くのサッカー場で50羽以上の群れで採餌していた。したがって、那覇市から豊見城市を経て糸満市までの海岸沿いで、ほぼ留鳥として定着して繁殖活動を行い、留鳥化の傾向がさらに進展していることが示唆された。

本種は本州などしばしば群れを作り移動しながら採餌していることが知られ、その夕刻近くには集団ねぐらが形成され、しばしば市街地の街路樹等が集中的に使われることがある。その結果として、糞による悪臭や道路の汚れ、群れ全体が鳴き合うため騒音などが発生し、住民の苦情が数多く寄せられることが生じている(川内, 1997)。沖縄でもその留鳥化の進展に伴い、さらに個体数が増加し、人間生活への様々な影響が生ずる可能性がある。このことから、今後ともに個体数の増減などその動向を注視することが大切であろう。

IV. 沖縄島における過去の観察記録の再検討と希少な観察記録

1. クビワオオシロハラミズナギドリ *Pterodroma cervicalis* の南西諸島初記録

県内では2004年2月に那覇市壺川で傷病鳥として保護され、著者の一人である高良の勤務する獣医科医院に収容された。同個体はその後の治療で回復・放鳥され、本個体は種オオシロハラミズナギドリ *P. externa* として報告されている(高原ら, 2008)。しかしながら、最近国内では種クビワオオシロハラミズナギドリ *P. cervicalis* の確認例として、1989年8月11日に千葉県における保護例(桐原ら, 2009)や小笠原近海での観察例があるとされる(永井, 2016)。このことから、前述したオオシロハラミズナギドリとされた保護個体の放鳥時の写真(図版Ⅲ写真2)複数枚や保護時の計測値などを詳細に再検

討した結果、明瞭な幅広の白い頸輪やはっきりした襟、翼下面の翼角から胴体方向に延びる黒帯などの特徴から同定の見直しを行った。

クビワオオシロハラミズナギドリについてはこれまでに学名と和名の変遷があり、混乱していたように思われる。日本鳥類目録改訂第5版(日本鳥学会, 1974)では、種オオシロハラミズナギドリ *P. externa* の国内産亜種の学名として *P. e. cervicalis* が用いられており1962年の愛知県記録を唯一としていた。日本鳥類目録改訂第6版(日本鳥学会 2000)では、種オオシロハラミズナギドリの国内記録を亜種オオシロハラミズナギドリ *P. e. externa* と亜種クビワオオシロハラミズナギドリ *P. e. cervicalis* の2亜種としたが、このとき1962年の愛知県の記録は亜種オオシロハラミズナギドリとされたため、亜種の和名と学名が変わってしまったことになる。

那覇市壺川での保護個体が2008年に種オオシロハラミズナギドリとして同定報告された当時は、本種の国内における観察記録などその知見が不足し、日本鳥類目録改訂第5版(日本鳥学会, 1974)に準拠して同個体を種オオシロハラミズナギドリとしたが、亜種については特定していなかった。その後、日本鳥類目録改訂第7版(日本鳥学会, 2012)では、オオシロハラミズナギドリ *P. externa* とクビワオオシロハラミズナギドリ *P. cervicalis* それぞれを独立種とした上で、クビワオオシロハラミズナギドリについては「本種は分類の再検討が必要と考えられたため、検討種とした」とされ、本目録には掲載されず、検討中のリストに掲載されている(池長ら, 2014)。前述したように、国内では最近になってクビワオオシロハラミズナギドリの保護や確認記録(日本野鳥の会群馬, 2012)が知られたことから、本県における過去の観察記録の同定を再点検した。保護された当時に得られていた画像から確認すると、同個体がオオシロハラミズナギドリではなくクビワオオシロハラミズナギドリである可能性が高いと考えられた。本種については上記のように日本鳥学会(2012)では検討種として扱われているが、これは2001年に本種によく似たバヌアツシロハラミズナギドリ(仮称) *P. occulta* の可能性も含めて検討されているものと考えられている(日本野鳥の会群馬 2012)。

バヌアツシロハラミズナギドリはクビワオオシロハラミズナギドリと極めて似ているが、測定値で比較すると小さいことが知られている(Shirihai & Bretagnolle, 2010)。

本個体の保護時に計測値を得ていたことから、本個体とクビワオオシロハラミズナギドリ、バヌアツシロハラミズナギドリおよびオオシロハラミズナギドリ(山階鳥類研究所標本)との比較を行った(表1)。本個体は平

表 1. 測定値の比較

	翼長 (mm)		尾長 (mm)	
	平均±S.D.	(Min.-Max.)	平均±S.D.	(Min.-Max.)
クビワオオシロハラミズナギドリ <i>P. cervicalis</i> ¹	303.45±6.12	(292.0-315.0)	126.27±5.68	(117.00-137.00)
バヌアツシロハラミズナギドリ <i>P. occulta</i> ¹	288.4±4.8	(281.0-294.0)	124.2±8.17	(117.00-137.00)
那覇市壺川での保護個体 (2004年2月14日)	300		125	
群馬県自然史博物館標本(VA-1597) <i>P. cervicalis</i> ²	302		129.2	
山階鳥類研究所標本(YIO-00464) <i>P. externa</i> ³	316		138	
山階鳥類研究所標本(YIO-00466) <i>P. cervicalis</i> ³	285		119	

(表 1 続き)

	跗蹠長 (mm)		嘴峰長 (mm)	
	平均±S.D.	(Min.-Max.)	平均±S.D.	(Min.-Max.)
クビワオオシロハラミズナギドリ <i>P. cervicalis</i> ¹	39.76±1.27	(37.6-42.7)	35.60±1.16	(33.5-37.30)
バヌアツシロハラミズナギドリ <i>P. occulta</i> ¹	36.21±1.66	(33.9-37.9)	32.17±1.07	(31.0-33.75)
那覇市壺川での保護個体 (2004年2月14日)	43		39	
群馬県自然史博物館標本(VA-1597) <i>P. cervicalis</i> ²	40.6		35.7	
山階鳥類研究所標本(YIO-00464) <i>P. externa</i> ³	39.8		38.7	
山階鳥類研究所標本(YIO-00466) <i>P. cervicalis</i> ³	40		38	

¹ Shirihai & Bretagnolle (2010)

² 日本野鳥の会群馬 (2012)

³ 山階鳥類研究所標本データベース (オンライン)

均的なバヌアツシロハラミズナギドリよりも大きく、日本野鳥の会群馬 (2012) で検討された個体と同様、クビワオオシロハラミズナギドリと考えられた。

クビワオオシロハラミズナギドリはオーストラリアのケルマデック諸島で繁殖し、非繁殖期には北緯35度以南の北太平洋西岸に飛来するとされる (桐原ら, 2009)。南西諸島では、これまで本種の観察記録は報告が見られないので、本記録が唯一のものと考えられる。

2. ヒメチョウゲンボウ *Falco naumanni*

2016年12月4日に国頭村辺野喜 (図版Ⅲ写真3)、2016年12月11日大宜味村喜如嘉で各1個体が、著者の一人である奥間によって確認された。本個体は雌で、爪の色は黄色味がかる白色を呈し、顔面にはハヤブサ科に特徴的な黒い髭が認められなかった。したがって、これらの特徴から本種と判断された。

県内ではこれまで西表島 (1984年3月) と与那国島 (1999年7月と2006年5月) の観察記録が知られている (沖縄野鳥研究会, 2010; 日本鳥学会, 2012)。したがって、この観察例は沖縄島では初めての確認と思われる。

V. 謝辞

本報告を行うにあたり、調査に便宜を図っていただき、本報告の紀要掲載について格段のご配慮をいただいた名桜大学総合研究所、本報告をまとめるにあたり、野

鳥の同定や本報告のまとめに有益な助言を賜った福岡県久留米市在住の池長裕史氏、貴重な野鳥情報と写真提供を賜ったよこはま動物園ズーラシア園長村田浩一氏、沖縄タイムス通信員の玉城学氏、沖縄野鳥の会の山城正邦氏、沖縄野鳥研究会の比嘉邦昭氏と大城亀信氏、埼玉県こども動物自然公園の天野洋祐氏、与論島在住の小野田明子氏に深甚より感謝申し上げる。

また、現地調査に格別な配慮を賜った沖縄県中部土木事務所中城湾港現場事務所にも感謝申し上げる。

VI. 参考文献

- Brazil M. A. 2009. Birds of East Asia, China, Taiwan, Korea, Japan and Russia. Princeton University Press. 528pp.
- Dickinson E.C 2003. The Howard & Moore complete checklist of the birds of the world 3rd Edition. Christopher Helm, London. 1039pp.
- 羽地邦雄・砂川栄喜・池長裕史 2011. 沖縄県多良間島におけるナンキンオシ *Nettapus coromandelianus* の観察記録. 日本鳥学会誌60 (2) : 246-249
- 五百澤日丸・山形則夫・吉野俊幸 2008. 日本の鳥550「山野の鳥」改訂増補版. 文一総合出版. 383pp.
- 今井光雄 1976. 与那国島にナンキンオシ. 野鳥 41: 651-652.
- 池長裕史・川上和人・柳沢紀夫 2014. 日本鳥類目録改

- 訂第7版で「検討中」とした種および亜種について。
日本鳥学会誌63: 134-149.
- 川内博 1997. 大都会を生きる野鳥たち, 都市鳥が語る
ヒト・街・緑・水. 地人書館. 245pp.
- 桐原政志・山形則夫・吉野俊幸 2009. 日本の鳥550,
水辺の鳥 (増補改訂版). 文一総合出版. 367pp.
- 黒田長久編 1984. 決定版生物大図鑑「鳥類」, 世界文
化社. 399p
- McWhirter, D. W. H. Ikenaga, H. Iozawa, M. Shoyama,
and K. Takehara 1996. A Check-list of the Birds of
Okinawa Prefecture with notes on recent status
including hypothetical records. Bulletin of Okinawa
Prefectural Museum 22:33-152.
- 三上桂・植田睦之 2011. 西日本におけるリュウキュウ
サンショウクイの分布拡大. Bird Research Vol. 7,
pp. A33-A44.
- 宮崎八州雄・大欣靖子・大欣和夫 2019. 観察記録, ナ
ンキンオシ *Nettapus coromandelianus* の九州初記
録. 日本鳥学会誌 68(1):77-79
- 村岡豊・村岡満里子・所崎聡 2014. 観察記録, 鹿児
島県トカラ列島平島におけるOrange-headed Thrush
*Zoothera citrina*の日本初記録. 日本鳥学会誌63(1):79-
82
- 仲地邦博・久貝勝盛 2019. 第7節鳥類, みやこの自然.
宮古島市史第3巻自然編 第1部 (本編) p.445-466.
- 永井真人 2016. ♪鳥くんの比べて識別! 野鳥図鑑
670 第2版. 文一総合出版. 399p.
- 日本鳥学会 1974. 日本産鳥類目録改訂第5版. 学習研
究社. 東京.
- 日本鳥学会 2000. 日本産鳥類目録改訂第6版. 帯広.
345pp.
- 日本鳥学会 2012. 日本産鳥類目録改訂第7版. 三田.
438pp.
- 日本野鳥の会神奈川支部 2013. 神奈川の鳥2006-10,
神奈川県鳥類目録VI. 362pp.
- 日本野鳥の会群馬 2012. 群馬県鳥類目録. 日本野鳥の
会群馬, 高崎市.
- 佐竹忠義・湯浅健・松井敬子 2011. 観察記録, 大阪府深
北緑地におけるナンキンオシ *Nettapus coromandelianus*
の記録. 日本鳥学会誌 60(2) : 254-256
- Shirihai, H. & Bretagnolle, V. 2010. First observations
at sea of Vanuatu Petrel *Pterodroma (cervicalis)*
occulta. Bull. B.O.C. 130(2): 72-80.
- 沖縄県文化環境部自然保護課編 2017. 絶滅のおそれの
ある野生生物第3版 (レッドデータおきなわ) -動物
編-. 712p.
- 沖縄野鳥研究会 2010. 訂版沖縄の野鳥. 編著者: 沖縄
野鳥研究会. 367pp.
- 佐藤重徳・三浦美知代・喜多村鷹也・木村宏 2016.
観察記録, 高知県大月町におけるナンキンオシ
Nettapus coromandelianus の観察記録. 日本鳥学会誌
65(2): 177-180
- Short, L. 1973. Notes on Okinawan Birds and
Ryukyu Island Zoogeography. Ibis 115:264-267.
- 砂川栄喜 2011. 沖縄宮古の野鳥 (亜熱帯の水辺, 山野
の鳥). ボーダーインク. 238p.
- 高原建二 1986. 国頭郡本部町伊豆味で「オオクイナ成
鳥1」野鳥473: 35. 日本野鳥の会.
- 高原建二 2001. 沖縄島南部の市街地で繁殖したツミと
リュウキュウサンショウクイの2種について. 沖縄県
立博物館紀要第27号: 45-50.
- 高原建二 2006. 名護岳周辺地域の鳥類について. 名護
岳. 名護市動植物総合調査報告書. 71-90.
- 高原建二・砂川栄喜・比嘉邦昭・宮城国太郎・高良淳司・
金城輝雄・仲地邦博・長嶺隆 2008. 沖縄県内におけ
る2003年から2006年までの希少な鳥類の飛来記録と希
少な繁殖記録. 沖縄国際大学南島文化研究所紀要「南
島文化」30号: 127-144.
- 高原建二・渡邊康志・中村和雄・比嘉邦昭・上原富二男
2009. GISを利用した那覇市内における鳥類分布変遷
の解析及び市内で確認された鳥類の記録. 沖縄大学地
域研究所研究彙報第5号. 75p
- 高原建二・比嘉邦昭・平安山英義・青山貴子・立松聖久・
井ノ口彰良・渡久地豊・村田尚史 2019. 名護市内及
び沖縄島における希少鳥類の観察記録と繁殖及び分布
記録について. 名護博物館紀要「あじまあ」21: 1-11
- 山階芳麿 1986. 世界鳥類和名図鑑. 大学書林. 1140pp.

〈引用した新聞記事〉

- 沖縄タイムス2019年5月9日社会面26ページ「巣立ちみ
んなで見守るね」中城・津覇小「リュウキュウコノハ
ズク」
- 沖縄タイムス2019年5月10日総合面1ページ:「ムクド
リ夫婦子育て大忙し きょうから愛鳥週間始まる」
- 沖縄タイムス2019年6月20日付「ズグロミゾゴイ 本島
初確認, 糸満」社会面25p.
- 沖縄タイムス2019年12月17日朝刊地域20p. 「ようこそ
本島へ, 大保ダムで越冬」カモ科「ナンキンオシ」初
確認, 渡久地さん撮影成功.
- 琉球新報2019年12月24日電子新聞「ナンキンオシ, 沖縄
本島で初確認 カモ類で最も小さく, 与那国と多良間
に続き3例目」

〈閲覧参考としたホームページ〉

オオコノハズクの音声：<https://www.xeno-canto.org/476076> (Xeno-canto.org is powered by the Xeno-canto Foundation and Naturalis Biodiversity Center) 参照

バヌアツミズナギドリ：山階鳥類研究所標本データベース (オンライン) 2020年3月1日参照<https://decochan.net/index.php?p=2&o=ssp&id=168> (YIO-00464), <https://decochan.net/index.php?p=2&o=ssp&id=170> (YIO-00466)

セイトカシギの繁殖記録：三重の野鳥光昌のホームページ <http://mitumasa.net/birdtop/bird/seitakasigi20120702/seitakasigi20120702P.html> 2020年7月31日閲覧

オレンジツグミ：<https://ryukyushimpo.jp/photo/preentry-226166.html> 琉球新報デジタルサービス閲覧 2020年10月18日閲覧

ズグロミゾゴイ：沖縄タイムスプラス：2019年6月20日付電子版「ズグロミゾゴイ 本島初確認 糸満」
<https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/435267>：2020年5月18日閲覧

環境省2020：<https://www.env.go.jp/>：web版「環境省レッドリスト2020の公表について (env.go.jp)」：2021年4月10日閲覧

図版 I. 希少な観察記録種 (1)



写真1. ヒシクイ (屋我地干潟)



写真2. ナンキンオシ (雌: 大保ダム)



写真3. オオクイナの確認環境
(国頭村)

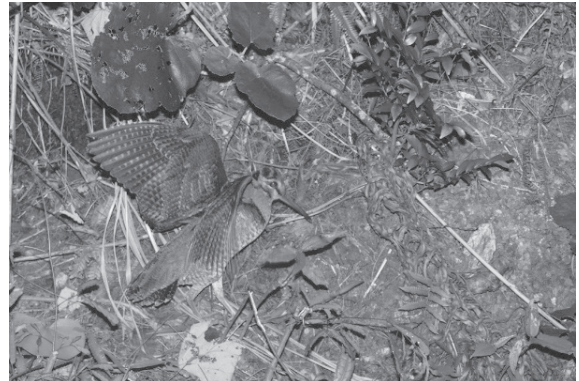


写真4. アマミヤマシギ
(名護市番越林道)



写真5. ズグロミゾゴイ
(糸満市: 比嘉邦昭氏撮影)



写真6. オレンジツグミ (側面)
(国頭村チヌフク林道そば林内)

図版Ⅱ．希少な観察記録種及び繁殖記録



写真1．オレンジツグミ（背面）
（国頭村チヌフク林道そば林内）



写真2．セイタカシギの卵と雛
（孵化直後：沖縄市泡瀬）



写真3．セイタカシギの雛（幼羽）
（30日齢：沖縄市泡瀬）



写真4．セイタカシギの幼鳥
（水面を泳ぐ：30日齢：同）



写真5．セイタカシギ幼鳥（左側3羽）
（46日齢：同）



写真6．リュキュウサンショウクイの育雛
（雛への給餌：読谷村）

図版Ⅲ. 希少な観察記録種及び繁殖記録



写真1. ムクドリ
(糸満市)



写真2. クビワオオシロハラミズナギドリ
(村田浩一氏放鳥時撮影)



写真3. ヒメチョウゲンボウ (雌)
(国頭村)

Record of the rare bird species and rare breeding cases in Nago City and Okinawa Island

— Spring 2019 to summer 2020 —

TAKEHARA Kenji, MIYAGI Kunitarou, TAKARA Junji, TOGUCHI Yutaka,
MURATA Naofumi, OKUMA Kuniaki, KOTAKA Nobuhiko, ARAKAKI Yuji

Abstract

This report is as compilation of past bird sightings in Okinawa Island including Nago City, from April of 2019 to August of 2020 with concentration on the breeding of rare migratory birds and their sightings as well as that of resident birds. This report also includes the reconsideration on subspecies sighting from the past records. *Gorsachius nelanolophus* and *Rallina eurizonoides*, of which their northern limit were considered to range up to Miyako islands, were actually sighted in Okinawa Island. The nesting of *Himantopus himantopus himantopus*, which were considered to be winter birds, was sighted as well. Among the migratory birds, *Nettapus coromandelianus* and *Zoothera citrina* were sighted for the first time in Okinawa Island. Regarding *Pterodroma cervicalis*, which was sighted in Okinawa Island in the past, is now increasingly recognized throughout Japan that it has become necessary to re-consider this species as *P. cervicalis*. Therefore, the record of sightings of this species have been re-examined. The sighting of this species in the Nansei islands was its first record.

Keywords: Okinawa Island, *Nettapus coromandelianus*, *Zoothera citrina*, Breeding of *Himantopus himantopus himantopus*, *Pterodroma cervicalis*

